



手波

## ジョギング

---

町田は毎日ジョギングをする

そして、海を眺めている女性を毎日見る

そして女性ミナはこう叫んだ「辞めたい」

僕は「ん」と思って。通りすぎた。

毎朝前から走ってくる小田

俺は音楽プロデューサーをしている、今はジオオをプロデュースしている、ジオオは3ピースバンドで女性で3人組だ。時代は電子音楽で3人とも楽器を持って歌う。しかも踊りながらだ。いつも最後のパフォーマンスでは。手から光を放ち、みんなの手とリンクするのがお決まりになっている。そして光を上にはなって、オージジ、オージジ、オジ、オジと同じダンスして終わる。それは間違いなく当たるだろうなと思って、新しく、男を募集した。それに毎朝会う、小田を入れてみようと考えた。そこで、「よう、オジジに入らないか？」とは言えないので、殴る事にした。やっぱりおもしろ可笑しく、ゴジラの格好をしようかと思ったので、次の朝はゴジラの格好に決めた。服でも焼いてしまえと、ガスバーナーも用意した。ゴジラの服を買いに行こうと思って、いつものとうりに行くと、ミナがいた。まだ海を見ているな、こんな長くいるのか？ミナに近づく男がいたので見ていた。小田だ。これはネタになると思って、近くで盗みぎぎした。「私ね、ここでイルカを見るのが夢なの」「いつもそのセリフだな、イルカは見えたのか？」「まだ見えない、だからここにいるのよ」「こんな汚い海じゃイルカは来ないよ」「そうか、こんな汚い海じゃ来ないわね、海を綺麗にするわ、あんたも手伝いなさい」「じゃあ、手伝ってやるけど、一つ条件がある」「何よ」「町田を俺のゴゴラに紹介しろ」「町田？誰よそれ」俺は思った。小田は音楽プロデューサーだったのか。そして仲間に連絡してゴジラの服を買って来いと連絡した。「俺はな、ゴゴラは当たると思ったんだ、それでな、小田が毎朝ランニングで会うから、あいつを入れて、面白くしようと思うんだ。」「わかったわ、町田って人にゴゴラに入れて言えばいいのね、そうしたら海を綺麗にしてくれるのね」「ああ、約束する」「じゃあ、約束するわ、どうしたら、海が綺麗になるのよ」「ここの防波てに前に綺麗な海水を流す、それを地下から通して全部やる、でも実験段階だからまずは上から流してみるか、俺が後はやっておくよ」「じゃあ、私はここに入れはいいのね」「その代わりに、町田に話しておけよ」そうすると、ゴジラの町田が現れた。バーナーで火が出ている。「小田ー！」町田はパンチした。「誰だ、お前」「その仕事は俺がやる、俺がゴゴラだ」「いいか、ミナ、その海の仕事はゴゴラが受け持つ」「小田とゴゴラどっちだ？」「かわいいからゴゴラがいい」「そうだ、俺はな海から出てきたんだぞ」「はぁお前、なに言ってるの？」「そういえばな、町田が言ってたぞ、オジジにお

前を入れたってな」「あのやろー、同じこと考えてたのか」「それで、どうだ、オジジには入りたいのか？」「ばか言ってんじゃねーよ、町田はゴゴラに入るんだ、いいかよく聞けよ、海も町田も俺の仕事だ、ミナ、こんな訳のわからない奴に仕事させるな」「ちょっと待ちなさい、ゴララ、その、着ぐるみ脱ぎなさい」「これは、脱げないんだ、脱いだらいけないんだ、俺は町田に言われてきたんだ、ミナいいかラストチャンスだ、どっちに仕事させるんだ？」「私がやるわ、だって私の夢だもん、イルカ見るの」「どっちか、なんだ、わかるか？」「私がやるの、あんたたちがここにいるから、あんた達は掃除スタッフよ」「仕方がない、手伝ってやるか、小田はどうなんだ？」「ミナが言うなら、やってやるか」小田は言った。「あのな、町田をゴララに入りたい」「町田は言っていたぞ、小田をオジジに入れたって」「それは、町田の意見だろ、あいつ、毎朝必ず、ジョギングで会うんだ。あんな頑張る奴はいないんだよ、あいつは歌は歌えるのか？」「元々、バンドのボーカルだ」「売れてたのか？」「そこそこかな、最後は、ベースが死んじまったんだって言っていたぞ」「なんてバンドだ？」「それは、教えちゃいけない事になっているんだ、小田はバンドやっていたのか？」「俺はドラムやっていたんだ」「なんてバンド？」「うーん、タダで教えるのも嫌だな、町田にゴゴラに入るなら、教えてやってもいいぞ、町田に連絡してくれ」「きっとだな、町田はゴララには入らないぞ、だって小田を入れたがっているんだから、オジジにこれならいいぞ、ミナをボーカルにして、ドラムを小田、ゴララがギター、これでいいんじゃないか？」「うーん、実はな、俺ないつかバンドはやりたかったんだ、ギターとベースが他のバンドに入ってしまったからずっとできなかつたんだ。」「じゃあ、町田の話をしよう、それと約束だ、ゴゴラの着ぐるみの正体は絶対に見ない事、それと町田はゴゴラにバンドやって欲しいって言ってたんだ。町田はロロイってバンドだよ。」「ロロイ？あー結構有名じゃねーか、女3人の1人で幸せにしてやろうと思ったのに、おかまみたいで笑えると思ったのにな。よし、いいや、ゴララとバンドやる、仕事もうまくいきすぎたし、遊んで食べれるだけは稼いだ、仕事しつつ、バンドやる、ミナいいか、バンドやるぞ」「私、やらないわ」

「何、言ってるんだよ、ミナ、バンドだって」「私は海でイルカ見てる人生なのよ、唄は歌わないわ、私、音痴なの」「え？音痴なの？」「ちょっと、歌ってみるよ」ミナが唄う。「音痴だな」俺は思った。素晴らしい歌声だって、多分、小田も思った。「なかなか、いいぞミナ」小田「音痴、音痴なんだな」「私、音痴なの知ってるわ」「いやいや、いい声してるって、な、小田」「なんだろうな、美しい声だよ、ほんととはね。」「え、うそ、じゃあ、バンドやるわ」「唄歌った事あるの」「ないって言っているでしょ、小学校の時、音痴って言われて、あんまり声出さなかったのよ」「唄は好きなのか？」「嫌いよ、私、イルカ見れればそれでいいわ」「それじゃいっか」「バンド名は？」「ミナとゴララと小田でミゴロでいいんじゃないね」「ミゴロだね」「桜みたいね、じゃあ桜をイルカに見せるが目標ね」「よし、そうしよう」「リーダーは？」町田は思った、ここだけは譲れない。「リーダーは俺がやる」「ゴララ、何を言っているかね、俺は実は音楽プロデューサーだよ。俺が仕事すればなんだって叶うよ。」「それは、俺も音楽プロデューサープロデューサーなんだよ。」「そうなのか、ほんとか？着ぐるみはいいけど本名言えよバンドやるんだし」「本名は言わない、ゴララのままで、なんでもゴララと書いておけ、そこでリーダーを決めるから、3人で走るなんてどうだ？、勝ったやつリーダー、どうだミナ、リーダーやりたいか？私がリーダーよ、歌うんだし」「仕方がない、そうするか」海辺に線を引いて3人で並んだ。「私が合図出すわね、いいわね。」「よし、俺さ、着ぐるみ着てるからちょっと前に行きたいんだけど」「そうよ、私、女なんだし私も少し前ね、半分よ、私足遅いし」「じゃあ、俺、着ぐるみふんで4/1前だな、平等に」「そうそう、これは平等よ」「小田はいつも走っているしいいわね、これくらいベンチャーじゃないと」「仕方がない」「ちょっと待て100メートルじゃだめ、200メートルにしよ」「よし、それでいいわ」線を引き直す。「行くわよ。よーい、どんって言ったらよ、わかったわね、いくわよ、

よーい

どん。ミナはその間に走っていた随分そのよーいは長く50メートルは走っていた。そして二人は止めなかった。そして着ぐるみを着た。町田は転んだ。やっちまった、仕事がらみで小田に吸収かそれは非常にまずい。頼むミナ勝ってくれ。小田は案の定トロトロ走っている。「え、小田いいの？」「お前、着ぐるみ着てるからな、俺のランニングのプライドが許さないんだよな、しかも誰だかわかんねープロディーサーにと言ってダッシュし始めた。俺も最速で走った。心の中ではミナまじ勝つと祈った。25メートルあたりにミナいる。俺も超ダッシュだ。そして小田がミナを抜く瞬間、ミナは足を出した。小田は転んだ。チャンスだー。「ウオーー」そして、ミナに追いついた。あと10メートル。そこで、ミナが足を出した。そして転んだ。そして、小田が起き上がった。「やばい」小田本気モード。「うおー」ミナが3メートルくらいだった。小田が追い抜いてゴール。「よし、勝った、リーダーだ」「ちょっと待て、ミナ、お前、足出したよな、小田に一回、俺に一回、ほんとなら、いけないことだぞ。」「そうね、私卑怯な事したから、よーいも長かったし、もう一回ね、これは練習よ。」「もう、いいじゃんこれで、いい道用意するから」「だめ、だめなのよ、今度は本気だからね、だから、私は25メートル、ゴララが50メートル、小田が200メートルこれでいいわ。どうですか？」「よし、そんなもんだな」「それで」「私が言うわね、行くわよ、よーい、どん」みんな本気。勝負は以外にもあっさり、本気を出した。ミナが一番だった。二着は小田、三着にゴララだった。「わかった、私、足早いよね。」「ちょっと待て」「お前、足早いんじゃない、50メートルだ」「いい、いい、ゴララは疲れた、ミナに賛成、なんとかなる、バンドなんて、そうそう、バンドバンド」「練習は海辺でやるわ、ここの許可をもらってもうライブ、えっと第3土曜日それに決まり、許可云々は私がやるわ、あんた達は海綺麗にきなさい。」「よし、それでいい、リーダーほいぞ。」「かあー仕方ない、いっか。最初からライブか、面白そうだな。よし、リーダー決定、じゃ乾杯しよ、酒買ってこい、ゴララ」「仕方ないな、沢山買ってきて、ビールかけしない」「いいわね、ビールかけしましょ」ゴララは近くのコンビニに全部行って、全部買った。そしてゴララは、最初の一杯だけは飲もうと言った。」「どうだミナと言った瞬間に飲んだ」「たく、乾杯」小田はビールをかぶっている、そして、どんどんこい、どんどんこいと言っている。俺はめんどくさくなって、海にビール沢山振って「イルカ出てこい」と叫び続けた。

そして、第3土曜日になった。小田が右側の水を流し、左が俺だ。特許もとって、申請も出した。1ヶ月で綺麗になるだろうと計算されている。そして今日設置が終わる。その設置を見ながら。ギターを久しぶりに触った。忙しくてそれどころではなかった。とりあえず曲もないし、ライブしながら作る。それが新鮮で面白かった。小田も設置と同時にドラムセットして久しぶりに叩いたみたいだった。そりゃ忙しいだろうなと思った。そしてステージを見てみると、マイクしかなかった。許可は出したみたいだった。エレキで弾きたかったけどそんな事だなんて思って、アコギを持ってきていた。最初はこんな感じくらいがいい。3時から6時3時間のライブ、イベント名は「バカって言わないで」と登録してきたようだ。入場料タダ。これはめんどくさいからタダらしい。リーダーが言うなら、それでいっかとなった。そして3時になった。そして、小田が間違えて言った「ミゴロ」ほんとなら「ミゴオ」だ。それもミナがミゴロで登録したためそうなった。そして俺はゴジラの着ぐるみを着たまま仕事も何もかもしている。仕事仲間にもお前はゴララ社長と命名している。そして、ミナが挨拶もなしに、叫び出した「イルカー！イルカー！イルカー！のエンドネス」告知もしていたため、お客さんはドン引き、そして、ギターもドラムもめちゃくちゃ。そして、ミナはイルカだったから、二人に遊びにだんだんとなってきた。ジャズベースにイルカーと叫ぶゆっくりした感じ。時折、イルカが激しくなってくると、ロックスタイル。を1時間続けた。そしてリーダーということでミナも一曲書いてきたみたいだった。

タイトル「イルカロック」

イルカ、イルカ、イルカは陸に上がって私とダンス

ダンスして私を海に連れて行って

海でイルカがパパになってママになって

私は人魚姫、そしてイルカを食べて陸に戻るのよ

イルカイルカイルカ背中から出る水は私だけのもの

キューキュー言ったら私は帰るわ

そしてキューピーマヨネーズ100本飲むわ

そして最後の一杯をイルカにあげるわ

イルカイルカイルカ小さな目が私の目

あなただけしか見れないわ

私の事イルカって言わないと

ジャンプしたらキックするわよ

そして、イルカの唄を歌って一旦、曲作りになった。「なるほど、いい曲じゃん」「あーいいよ、イルカ愛だね。」「なんで、そんなにイルカ好きなの？」「イルカは私なのなんか文句ある」「そうか、カラコンでもつければイルカっぽく」「そういうのはダメなの、私がイルカだから」「よし、できた」「俺も、できた」「よーし、行くわよ」一発目はなんだかだったけど。それを繰り返すうちにしっくりきた。そしていいねと3人は言って、「イルカロック行きます」と言

ってみんなで奏でた。そして一人お客さんがいた。そしてイルカロックが終わった時、くるっとイルカが飛んだのをみんなで見た。ミナは大はしゃぎで海に飛び込んだ。イルカが来た追いかけると泳いで行った。俺達ははどうする？と思ったけど、帰りを待つことにした。そしたら、12時くらいまで待って帰ってこなかったの、仕方なく、帰った。「よかった、イルカロックと言いたかったけど、言えずじまいだった。次の日にミナから連絡が来た。「イルカと戯れて遊んだそうだ」「生きていてよかったな、てっきり死んだかと思った」「イルカは私にあなたはイルカよと言ったそうだ、だから、私は本当にイルカなのよ」「そうか、イルカに認められればイルカだおめでとう」「今日ライブやるわ、リーダーからの命令よ、今からライブハウスでバカって言わないでやるわ、今から、曲書くから、あなたがライブハウスとっておいて、名曲よ」ブチ。「たく、無茶言いやがって、仕方ない、飲み会キャンセルしよ、小田にも連絡しなきゃな」そして、その夜、ライブハウスに集まった。「無事生還ライブだ」「どうだんだ、イルカ」「実はね、イルカの背中に捕まって、ずっと下まで行ったの、そしたらね、死んじゃおうと思って頑張ったの、そしたらイルカの島で起きて、イルカ達がいるずっとイルカと遊んでいたのよ。それでお願いしたの、私、生きててもいいの？ってそしたら、いいよってなんか聞こえたの。でも、私ここにいたいっていたら、ここはイルカの島だから、一日しかダメなのって。だから、って聞こえたら。いつもの砂浜だったの。私、またイルカの島に行きたいわ。だから、イルカの島って曲書いたの。

タイトル「イルカの島」

イルカは私なの私がイルカなの

イルカがイルカ私がイルカ

私がイルカ私がイルカ

もう陸には入れないわ

飛び込んだ世界は水の中

周りにはイルカウインクした

お返しにナデナデしたわ私のパパ

輪っか作って私をイルカにしたのねママ

パパとママの島に行くために

今日も私は水の中

水を口から吐き出すわ

早く背中から水が出ないかしら

私の全てがイルカなの

俺達は1グループでのライブで無料にした。そしたら奇跡が起こった。

なんと、その日限定ライブ「ミゴロ」ライブは多くのお客さんに恵まれた。そして、全員がイルカにしか見れなかった。すごい光景だった。イルカ達が口から輪っかを投げて来たり。背中から水を出したり。目でうウィンクしたり。「イルカの唄」と「イルカの島」に曲をやって。テンションがマックスだったため、のりでレックしてミカのノリで「今イルカ」という曲をやった。イルカは飛んで、俺達も飛んだ。そして、テンション上がってゴジラの顔が落っこってしまった。そしたらミカが「あーイルカだー」と叫びだして、結婚結婚、ここにいたわイルカ男、結婚結婚とそしたらお客のイルカ達も結婚だ結婚だと叫びだした。小田は町田てめーだったのか、そしてお前はイルカにしか見えねーと小田もドラム叩きながら、町田は結婚イルカ、町田は結婚イルカとみんなで叫びだした。「決めたわ、町田、あなたはイルカだから私と結婚ね、リーダーが言うわ、これを破ったら解散よ、こんなにイルカが言っているのに裏切らないわよね」「もちろん、私、イルカですから」そして、ゴジラの格好を辞め、イルカの着ぐるみを命じられ、俺はずっとイルカの着ぐるみをきたまま仕事をしている。そしてバンドもリリースして順調にライブしている。ただ嘘をついていた事は今では笑い話になっている、イルカの格好しているのに。そして、「ミゴロ」の打ち上げはいつも木に登って打ち上げをする。ミカはビールを木にかけて、小田は自分にかけて、俺はイルカだからそこで振って放つ。それで最近ではミナがイルカには魚ではなくて、私の作ったイルカケーキというのが絶対に好きだと言って、それが店になり研究を続けている。。。